汲江煎茶

元符三年　六十五歳（一一〇〇年）澹に在って作る。

1 活水還須活火烹　　活水は還た須く　活火もて烹るべし
2 自臨釣石取深清　　自ら　釣石に臨んで　深清を取る
3 大瓢貯月歸春甕　　大瓢　月を貯へて　春甕に帰し
4 小杓分江入夜瓶　　小杓　江を分って　夜瓶に入る
5 雪乳已翻煎處脚　　雪乳　已に　煎処の脚を翻し
6 松風忽作瀉時聲　　松風　忽ち　瀉時の声を作す
7 枯腸未易禁三碗　　枯腸　未だ　三碗に禁うるに易からず
8 坐聽荒城長短更　　坐して聴く　荒城　長短の更

江を汲んで茶を煎る

【語釈】

•活水…流水をいう。•活火…炭火の焔有るをいう。•瓢…水をくむ柄杓。瓢箪を縦にさいて作る。•甕…かめ。水、のみものを貯える陶器。•杓…ひしゃく。・瓶…ゆわかし。•雪乳…蔡襄の茶録に、茶の色は白を貴ぶ、というように、当時の茶は白色が貴ばれた。これは茶が立って乳剤のようにどろっとなったものをいう。•脚…抹茶を点てたばあい、茶の分子が下降してできるおどみをいう。•松風…松を吹く風。湯の沸く音を松風に比したのは、唐の劉禹錫の「西山の蘭若に茶を試む」の詩に「驟雨松声鼎に入って来り、白雲盌に満ちて花徘徊す」また「松風忽ち瀉時の声を作す」。•三椀…陸羽の茶経にみえるのは抹茶を直接釜に入れて煮る法であるが、その茶を三乃至五盌に酌み分ける。そしていう、「すべて第一盌と第二第三盌とは次ぎ次ぎに飲んでゆくのであるが、第四第五盌から外は余程咽が渇かない限り飲まぬものである」。•長短更…長短は更鼓の打つ数の多少。

【解釈】

唐の李約がいわゆる〝活火〟で煮るもの、それは、ぜひ活水でなくてはならぬ。そういうわけで、わたくし自身がみぎわの釣り石まで出むき、石の下の深く清みきった江の水を汲むことにしている。春の夜の水辺で大きなひしゃくを使って汲み取る水は、ひしゃくの中に貯えた月もろともに水がめにぶちこみ、春の夜の室内で小さなひしゃくを使って、水がめにおさまっている江の水を分けとって瓶に入れる。茶を点てて茶の脚がすっかり白い乳のようにどろっとなったとき、さっと瀉ぎこむ湯は、ちょうどしゅんしゅん松風の音をたてはじめたところである。わたくしの渇ききったはらわたをうるおすには、三椀にとどめることはつらいかぎり。荒城の鼓楼で打ち鳴らされる長短まちまちの更鼓に耳かたむけて坐っている。

【参考】
熙寧五年（一〇七二）三十七歳、八月十日、杭州の試院に在っての作。蘇軾はこの年、杭州の郷試（地方試験）の監試（試験の監督官）となった。試験期間中、試験本部に詰めるので、院内で茶を煎てこの詩を作る。蘇軾の詩で茶をうたったもののうち、とくによく煎茶の妙処を写し出していると評される。

試院煎茶

試院に茶を煎る

1 蟹眼已過魚眼生　　蟹眼 已に過ぎ 魚眼 生ず
2 颼颼欲作松風鳴　　颼々 として 松風の鳴を作さんと欲す
3 蒙茸出磨細珠落　　蒙茸 磨を出でて細珠落ち
4 眩轉繞甌飛雪輕　　眩転 甌を繞りて 飛雪軽し
5 銀缾瀉湯誇第二　　銀缾 湯を瀉ぎ 第二を誇る
6 未識古人煎水意※　　未だ識らず 古人 水を煎るの意
7 君不見昔時李生　　君見ずや 昔時 李生
8 好客手自煎　　客を好み 手自ら煎ぜしを
9 貴從活火發新泉　　活火従り新泉を発するを貴ぶ
10 又不見今時潞公　　又見ずや 今時 潞公
11 煎茶學西蜀　　茶を煎て 西蜀を学ぶを
12 定州花瓷琢紅玉　　定州の花瓷 紅玉を琢す

……

※古語云煎水不煎茶。古語に云ふ 水を煎て 茶を煎ず

【語釈】
●試院…科挙の試験の試験場。●煎茶…「茶を烹る」。唐の陸羽が「茶経」を著わしたころから盛んとなる。●蟹眼・魚眼…湯が沸きたぎって、ブクブクとたつ泡の立ちかげん、蟹の眼は小さく、魚の眼は大きい。●蒙茸…草の乱れ生ずるさま。物のみだれるさま。乱れ走るさま。●颼颼…風の音。雨の音。寒いさま。●磨…ひきうす。●眩転…めまい。●甌…深いわん。●缾…水がめ。

●第二…唐の張又新の煎茶水記に、茶によく合う水を挙げ等級をつける二つの説を記すが、無錫の恵山寺の石水が、いずれの説でも第二に数えられている。蘇軾はこの翌年十二月、恵山（江蘇省無錫県の西門外五里）を過り、銭道人に謁し小竜団を烹ての詩に「来り試む　人間第二泉」という。●李生…唐の李約のこと。「手自煎」李約は来客があると、碗数を限らず、終日茶器を持って倦まなかったという。●活火…因話録によると李約の語に「茶は須く緩火もて炙り、活火もて煎るべし。活火とは炭火の焔有る者を謂ふ」●潞公…宋の文彦博・学西蜀　西蜀は四川省西部、茶の産地で蘇軾の出身地でもある。●定州…今の河北省の定県。すぐれた磁器を産し定窯といわれる。

【解釈】沸きたつ湯は、蟹の眼ぐらいのあぶくの状態はもう過ぎて、魚の眼くらいのあぶくになっている。しゅうしゅうと松吹く風のうなりが今にもおこるであろう。ひきうすから乱れ出て来る抹茶は細かに砕けた真珠のように落ち、碗の中で目くるめくようにまわる泡は吹雪さながらに軽く飛ぶ。銀の瓶から瀉ぎかけた湯は自慢の天下第二泉。〝茶を煎る〟のではない、〝水を煎る〟のだ、といった古人のこころが、まだわたしにはよくわかってないながらも。

ご覧なさい。昔、唐の李約は客好きで、来客があると自分の手で茶を煎たという。その煎かたは、勢いのよい火で新鮮な水を沸きたたせるのがよいとした。またご覧、ちかごろ、潞公、文彦博は、茶を煎るのに西蜀の法をまねていられる。まっ赤なルビーをみがきあげたような花模様の画がかれた定窯の碗を使われる。

漢詩大系　蘇東坡　近藤光男より抄出

中国茶と漢詩　『人民中国』（peoplechina.com.cn）　庶民生活に溶け込んだ喫茶

(460) 団茶 - YouTube

小竜団　茶 - Google 検索